

SMC金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain 豊島 健治

株価は何でも知っている！？

日経金融新聞に「株価を語る」というコラムがある。株式を公開している企業のトップが登場して自社の株価をどう思いどう見ているかを語るもので、いつも興味深く読ませていただいている。このコラムを続けて読んでみると、経営者の自社株の評価について一つの傾向があることが判る。それは簡単に言うと「株価は市場の通知票とされているが、我が社への評価は低すぎる」というもので、株価が低すぎることに不満を述べているケースが多い。

しかし、昔平尾昌明という歌手が甘い声で「星は何でも知っている」と唄っていたが、その言い方をまねると「株価は何でも知っている」と言っているように思う。

株価とは何かと尋ねられたら、少し理論的に言えば「企業の現在の解散価値 + 将来の期待収入の現在における割引価値 - リスクプレミアム」とでもなるが、要は「美人人気投票」(ケインズ)である。いくら理論で押して行っても人気があれば眼にも留められないし、買う人が多くないと株価は上がらない。

現在の日本において、上場企業の中で最も美人の誉れが高く人気のある企業とその逆の企業を後記にランキングしてみた。

この表から幾つかを指摘してみる。第一に、同じ額面でありながら最低と最高では約500倍違うということである。経営者にとってこの違いは天と地ほどの違いであろう。第二に、高い方はカタカナ名の会社が多く、低い方は殆ど古びた日本語名の会社であるという点である。名前自体に意味はない筈であるが、名前に懸ける意気込みが違うのであろうか。よく判らない。そして第三には、業種に傾向があるという点である。高い方に電気ハイテクが多いのは当然として、ノンバンクの商工ファンドが断頭の1位で日栄が4位という位置を占めていることにビックリされた方もいるのではないだろうか。しかし、低い方の業種構成はいかにもという感じだ。

この数字で表わされる評価は、しかし正しいのであろうか？正しく企業を評価しているのだろうか？と問えば「いや、正しくないかもしれませんが」と答えるべきであろう。しかし、それでもこの数

字で表わされる株価は「何でも知っている」と言うべきように思う。高も低も、正も否も、良も悪も、そして美醜や善悪までも知っているように思う。だから株価は間違うのであり、だから株価に違和感を経営者は持つのだと思う。

昨年の後半一部の企業が、売り叩かれて暴落した自社株に青ざめて、証券監視委員会に駆け込んで泣き言を垂れたが、「風説の流布」さえも株価は知っているように思う。

上場企業株価ランキング(2月10日現在)

【高株価ランキング】

順位	企業名	株価(円)	業種
1	商工ファンド	41,500	その他金融
2	キーエンス	17,900	電気機器
3	ローム	12,600	電気機器
4	日栄	12,500	その他金融
5	任天堂	11,400	その他製造
6	ソニー	11,200	電気機器
7	SMC	10,700	機械
8	アドバンテスト	9,110	電気機器
9	TDK	8,930	電気機器
10	セブンイレブン	8,570	商業

【低株価ランキング】

順位	企業名	株価(円)	業種
1	中外鉱業	84	非鉄金属
2	日之出汽船	88	海運
3	太洋海運	90	海運
4	昭和海運	93	海運
5	関西汽船	100	海運
6	日本伸銅	113	非鉄金属
7	青木建設	114	建設
7	殖産住宅	114	住宅
9	日本レース	116	繊維
10	日本製麻	117	商業

(注：全て50円額面に引き直しています)